

質実剛健

## 『タイケンをコトバにする』

第18回目のQ講座は、「菊池のんびり農村生活体験」を終えた翌日に実施されました。講師には、熊本県立大学総合管理学部教授の津曲隆先生とその研究室の学生さん7名をお招きしました。3日間の菊池での「タイケン」を「コトバ」にしていくことを教えていただきました。もちろん、子どもたちにとっては初めての方法で、「知識には遠い・近いという『距離』がある」、「概念ツリー」、「分類は新しい発見のための原動力」などの耳に新しい言葉たちが、生徒たちを引き込んでいきました。3日間の楽しかった体験、思い出に残った体験、新鮮であふれ出てくる思い出が次々に整理されていき、短時間のうちにまとまっていく。「菊池のんびり農村生活体験」という百科事典を創った2時間でした。

また、これから数回にわたってお届けするQUESTは、Q講座の一つの柱である「キャリア教育」として位置づけ、様々な分野で研究を行い追究することを仕事にした人を迎えて授業を行っていきます。

### 講師の紹介

津曲隆先生

熊本県立大学総合管理学部は、行政・経営・情報・地域福祉の4つのコースに分かれています。その中の情報管理コース（情報）に所属されており、情報学を専門とされています。



メディアの役割とそれを活用したまちづくりの手法などを研究されています。特に、地域社会におけるメディア（地域メディア）を対象にしているそうです。デジタル機器を活用して地域を様々なメディアによって表現していくプロジェクト「Produce X」など、詳しくは研究室のHP(<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~produce-x/index.html>)をご覧ください。

また、今回のワークショップを電子ブックにしてまとめていただいています。是非、もう一度見返して見てください。

「タイケンをコトバにしてまとめよう」ワークショップ電子ブック URL:

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~tumagari/workshop/utojh2010/>

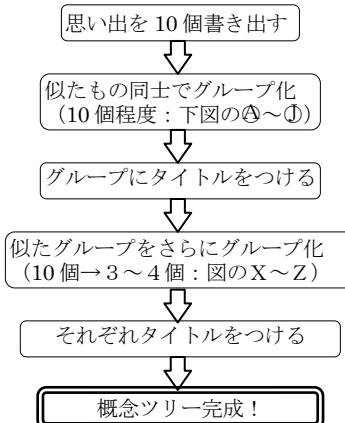
### タイケンをコトバにする

今回の学習は、10人ずつのグループで学習を進めました。それぞれのグループに、「ファシリテータ」の学生さんが一人ずつ入り、学習のサポートをしてくださいました。

※ファシリテーション(英: facilitation):

ファシリテーションとは、会議等の場で発言や参加を促したり、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりする行為を指します。また、ファシリテータとは、その行為を行う者のことをいいます。

### 授業の流れ



左のフローチャートのような流れで授業は進められました。各グループにタイトルをつける時には、さらに説明を加えました。このグループに分ける作業がなかなか大変です。まとめた項目を包括するコトバを探すのが大変なのです。

### キーワードは『キーワード』

この作業の困難さは、菊池のんびり農村生活体験を特集したQUESTは、伝えたいことが多すぎて3号に渡ってお届けしたことから推測してください。『簡潔にまとめること』の難しさは、子どもたちも十分に感じたようです。

最初の付箋は各班で100枚になります。「似たもの」でまとめてキーワードで表してみると、はみ出すものが出てくるのです。すべてのものが収まるキーワード探しは、行き詰まるとそこから抜け出せません。抜け出すために必要なことは、「視点を変えること」です。

### 菊池のんびり農村生活体験

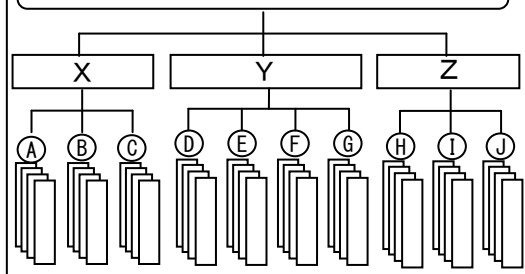


図 概念ツリー

「これとこれは似てる」と思っているけど「どこが似てるの?と考え込んだ自分に驚いた。共通項目を分けていくのに、キーワードが思い浮かばず困ったが、高橋君や中山君がまとめた言葉を言ってくれて驚いた。よく考えてみると、その言葉に共通点があった。似た項目も多く、みんな同じようなことを感じたのかと思ったが、少しずつ注目している場所が違うこともおもしろかった。(2組安部友里菜さん・抜粋)

あるひらめきが行き詰まった事態を打開することは、科学の分野でもよくあることであり、大きな前進への原動力となるものです。

## 知識には距離がある

そして『概念ツリー』ができあがりました。表面の図をご覧ください。これは、単に体験を分類したものではありません。例えば④と③と①を比較してみます。④と③はXという共通項目でくくられます。①は別項目Yに含まれますが、Yの中では比較的Xに近い。また、④と③は同じXという項目の中にありますが、③のほうが④より①に近いわけです。

このように項目間には距離が生じるわけです。しかも、この距離感はどうな視点で整理するかによって大きく違いが出てくるのです。一人10項目ずつ出し合った時点では100枚の付箋は班ごとにあまり大きな違いはなかったでしょう。しかし、X、Y、Zの時点では、ある班は「Enjoy・Study・People」に分け、ある班は「自然のもの・生活に必要なこと・その他の必要なもの」に分けています。視点が変われば項目の距離感が変わります。これは新しい学問ができることと同じです。『菊池のんびり農村生活体験学』という学問ができ、そしてそれを体系的にまとめた百科事典ができたのです。

## 分類は新しい発見・創造の原動力

ロシアの化学者メンデレーエフは、それまで発見されていた元素を並べると、周期的に性質を同じくしたものが現れ、グループ分けできることを発見しました。そして、当時発見されていない元素の存在を予言し、彼の死後、まさに予言したとおりの元素が発見されました。

体験したこと、経験したことを言葉にしてまとめることはとても大切なことです。体験を言葉にすることで漠然とした記憶を整理整頓していくことができます。そして、この営みは、人文・社会・自然を問わず科学の基本なのです。我々人類は、これまで様々な経験を知識として集約してきました。集約した知識を整理して、自然界に存在しない新しいものを創造してきました。新しいものを創造するためには、過去の歴史や経験を学ばなければならないという津曲先生の言葉はとても重みのある、深い言葉でした。宇土中を卒業し、想像力豊かな人材として社会で活躍してくれることでしょ。生徒たちの感想を読み、そのようなことを感じました。

## 生徒たちの声

僕は今日の授業で、体験や物事を分類して整理するだけで、新しい考えや共通点などが見えてくるのがわかりました。また、分類することが新たな人工物をつくる上でとても大事だということに驚きました。こうして考えてみると、人が使っている道具のほとんどが分類をヒントにしてつくり出されているのではないかと思います。これらのことから、



「分類すること」は、僕たち人間が栄えていく上でとても大事だと思います。ぼくもこれから分類することによって新しいことを見つけていければいいと思います。



(1組 関 良朝くん)

(1組 関 良朝くん)

今回は熊本県立大学の先生と学生の方が来られて、体験を言葉にしてまとめました。体験したことを言葉にすると新しい発見が出てくるということでした。実際に菊池での体験を概念ツリーにして言葉で表すと、「こんなことがあったんだ!」という発見がありました。そしてツリーを見ることで、菊池でやったことが一目でわかるようになりました。今日まとめたことを生かして他の人に菊池の体験を伝えることができたらいいなと思いました。



(1組 早川 理夏子さん)

今回のQ講座では、「菊池のんびり農村生活体験」を言葉にしてまとめることで、菊池のことを振り返ることができました。ファシリテータの森さんに教えていただきながらツリーをつくることができました。体験を整理すると新しい発見をすることができることもわかりました。これからは何か体験した後は、言葉にして整理してみたいと思いました。

(2組 甲斐 絵理奈さん)

今回のQ講座では、熊本県立大学の先生と学生の方に来ていただきました。ファシリテータの松尾さんには、概念ツリーなどをつくるのを手伝っていただきました。私が心に残ったことは、星座観察などで、まずそれを付箋に書きだし、どんどん概念を絞って考えていきました。それをすることで、大きく分けてどんなことがみんなの心に残ったのかがよくわかりました。津曲先生のお話はとても興味深いものでした。

(2組 吉窪 理々さん)